

マルティン・ハイデガー

時間の概念

田中 純夫・阿部 ふく子 訳

論考「L・クラークスの表現概念」

深澤 助雄

2013年度も、活発な活動を続けていることを申し添えたい。

(文責・栗原 隆)

## 〈声〉とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

### 1. プロジェクト名：〈声〉とテキスト論

### 2. プロジェクト概略

本プロジェクトの目的は、〈声〉の文化が、これまでの歴史の中で、テキストの文字言語との闘ぎ合いから始まり、制度的なさまざまな制約と葛藤、軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに、文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力、豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか、その諸相を例示し、さらに〈声〉から、いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを、具体的に明らかにすることである。そこに新たな人文科学研究の可能性がある。

当面は、〈声〉と制度の様々な関係を、歴史的かつ領域横断的に検討するために、各国文学（日本文学、中国文学、朝鮮文学、イギリス文学、フランス文学、ロシア文学、アメリカ文学）、映像論、啓蒙思想などを専門とする研究者をメン

バーとし、さらに、従来からのボルドー第3大学の研究グループ（「モデルニテ」）と連携し、国内の他大学の研究者（とりわけ、人文学部と交流協定を締結している愛媛大学法文学部、岩手大学人文社会科学部）にも参加を呼びかけ、〈声〉に関する国際的かつ領域横断的な共同研究体制を確立し、定期的に国際シンポジウムを開催するとともに、研究報告集を刊行する。

### 3. 参加メンバー（平成25年4月現在）

先田進、鈴木孝庸（新潟大学フェロー）、廣部俊也、藤石貴代、佐々木充、高橋康浩、高橋早苗、平野幸彦、斎藤陽一、番場俊、橋谷英子、鈴木正美、逸見龍生、市橋孝道、高木裕

### 4. プロジェクトの進捗状況

本プロジェクトは、これまでの人文学部研究プロジェクト「〈声〉とテキスト論」の研究成果を踏まえ、学系附置コアステーション「〈声〉とテキスト論研究センター」を基盤にしながら、制度的な抑圧を受けてきた〈声〉を文学テキストのみならず、文化の様々なジャンルにおいてとらえ、そこから見えてくる問題を追究した。この問題を領域横断的に深めるために、日仏の共同研究をさらに発展させ、昨年度、採択された日仏研究交流プログラム（SAKURA プログラム）（2012.9.11.12）あるいは国際シンポジウム（2013.3.8）をとおして、〈声〉というテーマが、国際的な共同研究にふさわしいものであることを確認し、研究成果を海外に発信した。

実施内容は、一つは芸術家・作家・詩人と対話をしながら、現代社会における〈声〉の表現の多様性を探る試みと、もう一つはこれまでの文化における〈声〉と制度の問題を国際シンポジウムの開催あるいは発表を通して、歴史的に掘り下げることである。

#### (1) 芸術家・作家・詩人との対話

実践的に〈声〉の問題に深く関わっている作家、詩人、芸術家との対話と

交流を社会に公開し、同時に研究に新たな視点と発想を取り入れる試みである。3.11後の文学表現のあり方については、詩人・作家は、言葉を超える現実体験に〈声〉を失い、表現に苦しみ、新たな方向を模索している。彼ら、彼女たちの生の〈声〉をとおして、継承されてきた〈声〉の表現がいかに変容の時を迎えているかを確認した。具体的には、以下の日時に、本プロジェクト主催で、講演会あるいは公演会を開催し、多数の市民が参加した。

#### 平成24年度開催

- 7月15,16日 新潟市西蒲区の福井地区の古民家において、作曲家のミシェル・ナガイによる、西洋楽器と日本の伝統楽器をともなう、声を用いた作品「知ることの歌」の公演を主催した。
- 11月19日 芥川賞作家 多和田葉子氏とピアニスト高瀬アキ氏を迎えて、公演「変身」を開催した。
- 11月24日 詩人 中島悦子（H氏賞受賞、新潟大学出身）による講演会「危機の中にある言葉」（駅南キャンパスときめいと）
- 12月21日 詩人 三角みず紀氏（H氏賞、中原中也賞、歷程新鋭賞など受賞）による朗読と映画上映（総合教育研究棟）

#### (2) 国際シンポジウムの開催

平成25年3月8日に、「〈声〉の制度 — 継承・侵犯・障害 — PART2」と題した国際ワークショップ（会場：新潟大学）をボルドー第3大学、岩手大学、愛媛大学の3大学と連携して、開催した。第1部ではボルドー第3大学からはブリジット・ルーシヨン教授による基調講演「フランス19世紀女性作家に強いられた沈黙」（通訳：逸見龍生）があった。

フランス19世紀前半の第1帝政期から王政復古期にかけて、出版業界の興隆とブルジョワ家庭の女性たちの進出が、多くの女性たちの著作を世に送り出した。しかし、その多くは現在では残っていないだけでなく、当時のジャーナリズムにおいて、正当な評価を受けていなかったことを具体

的な資料をもとに説得的に示された。基調講演では〈声〉を取り巻く制度の問題とジェンダーの問題が根深く絡んでいることを確認した。

第2部のワークショップでは、文学・宗教学領域における〈声〉の問題を議論し、〈声〉と文字の相克が時代を超え、領域を超えた問題であることを再確認した。

第2部の発表者と題目は以下の通りである。

佐々木充：「〈声〉はどこへ行った？—近世儒学・国学における〈声〉の消失と回復—」

先田 進：「『金閣寺』の文字と〈声〉」

廣部俊也：「物語を語らぬ戯作者」

高橋康浩：「エレミヤの嘆きと現代アメリカ社会」

### (3) ボルドー第3大学国際シンポジウム

平成24年9月11日及び12日に、日仏（二国間）交流事業（SAKURA）の下で開催され国際シンポジウム「自己表現への障害」（会場ボルドー第3大学）において、研究プロジェクト代表の高木が、研究成果（「La poésie nervalienne et le sujet en devenir」）を発表した。シンポジウムのテーマは、近代詩における自己表現の困難という問題であったが、ネルヴァルの詩篇における主体の生成と〈声〉の関係について論じたものである。

## 5 プロジェクト成果の発信

### (1) 研究発表 高木：「La poésie nervalienne et le sujet en devenir」

平成24年9月11日 日仏（二国間）交流事業（SAKURA）、国際シンポジウム「自己表現への障害」（会場ボルドー第3大学）

### (2) 人文学部紀要『人文科学研究』第132輯において、プロジェクト特集を組み、プロジェクト分担者2名が以下の題目で執筆予定した。2013年3月刊行。

①氏名 鈴木孝庸 題目：平曲譜本『吟譜』の息継ぎ点

②氏名：鈴木正美 題目：ウチヨーソフとテア・ジャズ — スターリン体制下のジャズと大衆歌謡（3）

(3) 国際シンポジウム「〈声〉の制度 — 継承・侵犯・障害 — PART2」報告集2013年11月刊行（新潟大学人文学部）

## 19世紀学研究

研究代表者 松 本 彰

### 1. 参加メンバー

松本彰（代表）

石田美紀

井山弘幸

城戸淳

桑原聡

佐々木充

鈴木正美

高木裕

高橋秀樹

逸見龍生

細田あや子

三浦淳

宮崎裕助